

平成 22 年度 「スラブ・ユーラシア地域（旧ソ連・東欧）を中心とした総合的研究」 共同利用 報告書 京都造形芸術大学非常勤講師 江村 公

今回の 7 月、3 月の二回の滞在を通して、大きく二つのテーマに基づき、資料収集を行なった。まず、第一には当初の研究課題「科学と芸術の協同： 20 世紀初頭ロシア芸術と身体・感性のテクノロジーに関する歴史的考察」に沿ったものである。申請者は 20 世紀初頭のロシア・アヴァンギャルド芸術での「道具」や「機械」の表象に関心を持ってきた。こうしたイメージは身体の部分的な機能の拡大と解釈される「機械投影論」的なものではなく、身体と機械の接続によって生じる身体全体や感性のダイナミックな変容の表れと見なせるだろう。つまり、当時の機械や道具の表象は、従来論じられてきたような単なる機械主義／科学礼賛とは異なり、身体や感性に関する系譜学という歴史的背景に結びついており、その起源はロシア 19 世紀以来の心理学／脳科学に遡ると考えられる。当時、まだ明確に分化していなかった心理学や脳科学の基盤には、身体と環境のつながりをめぐるエネルギー論が重要な役割を果たしていたことが指摘できる。その手掛りとして、ペフテレフとボグダーノフに着目し、平成 22 年 7 月の滞在中、両者に関する資料を中心に調査を行なった。特に、ペフテレフはペテルブルクを中心に活躍した心理学者・生理学者であり、パヴロフの論敵でもあったが、心理学や生理学の枠組みのなかでのみ論じられることが多かった。ペフテレフは、パヴロフのような機械的条件反射とは異なる、「集団反射」を説いた人物として、同時代の芸術家に多くの影響を与えたと、近年の先行文献で指摘されるようになってきている。「生存競争」よりもむしろ「相互扶助」というロシアの生物学の伝統に基づいたその世界観は、19 世紀から 20 世紀初頭にかけてのロシア文化を理解する際に、ロシア・コスミズムや精神分析の流れとは異なるまた別のアプローチの可能性を与えてくれるだろう。具体的には、こうした研究を継続しながら、20 世紀初頭の芸術に表現された機械／身体／自然の葛藤を解き明かす手掛りとして、論文執筆に活かしていきたい。

第二には、当初の研究計画の予定には入れていなかったものだが、1930 年代ソ連の国家的アイデンティティの表象や、その境界のイメージに関する研究についての資料収集である。北大図書館には 30 年代のソ連で出版されていたグラフ雑誌『建設中のソ連』のドイツ語版が一部であるが所蔵されている。この雑誌は、ソ連の表象を考えるうえで、また、ロトチェンコやリシツキイなど著名なアヴァンギャルディストが編集に参加していたことなどから、多くの先行文献によって論じられているが、個々の具体的な表象についてはあまり詳細な議論はなされてはいない。このグラフ雑誌に掲載されているいくつかのテーマは、単にソ連の国家的プロパガンダを越えて、歴史的にも非常に興味深いものである。というのも、かつてのロシア帝国の時代から議論されてきた境界のイメージが取り上げられているからだ。申請者はそのうちの「コーカサス」「極東」「北極海」のイメージを鍵に、現代のロシアに連なるソ連という国家の歴史と「美術史」「視覚文化」という枠組みでくくられる表象の歴史との交差を今後明らかにしていきたい。

最後に、こうした貴重な研究調査の機会を与えて下さった、北海道大学スラヴ研究センター、研究所長望月哲男先生をはじめ、諸先生方、スタッフの皆様にご心から感謝申し上げたい。